うた×バト③

歌で伝える私の想い!

緋村燐・作

ももこっこ・絵

アルファポリスきずな文庫

もくじ♪

夏休みのはじまり……6
契約成立！　そして合宿へ……30
トラウマの原因……39
恋のゆくえ……62
大切なキミとのこれから【雄翔side】……68
大丈夫だって、伝えたい！……77
合宿は前途多難？……88
中島先輩と長澤さん……98
恋愛相談……112
悪意の誘い……122
大切なキミを守りたい【雄翔side】……140
私のヒーロー……146
抑えられない気持ち……159
キミの光にあこがれて【雄翔side】……176
あなたにだけは、負けない！……179
予選の前に……188
乗り越えて、星になる……199
花園で秘密の告白……226

ナズナ

花環プロに移籍してきたアイドル。
長澤さんと流歌のことが
気に入らないらしく……？

横山陽向

アイドルグループ S-JIN のメンバー。
流歌のことが好きみたいだけど…？

長澤絢

天才子役タレント。
メタモルフォーゼができる。

吉岡藤子

流歌の同じクラスの同級生。
流歌の頼れるチームメンバー!

本田千代・千絵

双子の姉妹。
千代が作詞家希望、
千絵が作曲家志望。

金井流歌

歌うことが大好きな中学一年生。
夏合宿でドキドキ!?

ラブちゃん

流歌の相棒の
『うたアニ』。
メタモルフォーゼが
できるようになったよ!

橘雄翔

アイドルグループ
S-JIN のメンバー。
流歌の最推しアイドル。
流歌のことが大好き。

シング・バトルとは!?

歌声から感情を読み取り、成長するAIアニマル『うたアニ』同士を戦わせるバトルのこと。
今、超・人気のeスポーツだよ！　キーワードの入った歌に思いを込め、上手くいけば『メタモルフォーゼ』ができる。

○夏休みのはじまり

「父さん、母さん。ほら、始まるぞ？」
そんな声で始まったのは動画の観賞会。
テレビに映し出されたのは、私・金井流歌とお兄ちゃんの奏月が通っている星彩学園のイベント映像。
ほんの数日前に開催された、シング・バトルの一学期末トーナメントの映像だ。
シング・バトルっていうのは、歌声から感情を読み取り成長するＡＩアニマルの『うたアニ』を戦わせるｅスポーツのことで、星彩学園はその選手育成に特化した学園なの。
ちなみに私はプレイヤーで、お兄ちゃんはエンジニア。
エンジニアっていうのは、『うたアニ』が戦うときのエフェクト作成や、設定をする役割。
たくさんの知識も必要で、研究がとっても大事なんだって。

だからお兄ちゃんは、今後の勉強のためにって各学年の決勝戦の映像をＤＶＤに焼いてもらったみたい。
夏休みに入って家に帰ってきた私とお兄ちゃんは、その映像を家族四人で見始めたんだ。
「あっ！」
思わず声を上げちゃったのは、映し出されたのが私の試合だから。
中等部一学年の決勝戦。満開の桜のフィールドで、制服姿の私そっくりなアバターと、相棒であるうたアニ――ラブちゃんが一緒に映っていた。
ラブちゃんは茶色の毛並みで垂れた耳が特徴のうさぎ。とってもかわいいの！
相対しているのはライバルの長澤絢さんのアバターと、彼女のうたアニ、くちばしが黄色っぽい黒い鳥のクロウだ。
シング・バトルではフィールドとうたアニに属性があって、それぞれの属性が同じだと補助ポイントが入って有利になる。
このときのフィールド属性は**【木】**。ラブちゃんの属性と同じだったから、私の方が有利だった。
先攻は長澤さん。キリッとしていて美人な彼女は、凛とした雰囲気で口を開いた。

『クロウ、私の歌を聴いて！』

その言葉から始まったシング・バトルは、結果を知っていても胸が躍るほどすごかった。

シング・バトルでは、歌詞に入った攻撃や防御を意味するキーワードに反応して、うたアニの技が発動する。

使える歌は、ゲーム会社ＴＯＫＩＷＡが用意した基本の歌をアレンジしたアレンジ歌と、曲、歌詞、技のエフェクト全部を初めから作った創作歌。

全部オリジナルの創作歌の方が強力になるから、プロのｅスポーツ選手は創作歌を歌うことが多い。

私と長澤さんも、初めの一バトル目は確実に技が発動するアレンジ歌だったけれど、二バトル目からは創作歌で勝負していく。

それぞれ攻撃と防御が入れ替わって、二バトル目も終了。

そしてラストの三バトル目。

私は息を呑んで画面を見つめていた。

画面の向こう側、先攻である長澤さんの攻撃でバトルの盛り上がりは最高潮に達している。

光集め　大切に育てるの
姿変え　光掲げろ　その手には栄光を
つかみ取れ　勝利の刃　立ちふさがるものをなぎ倒せ！

攻撃のキーワードは【刃】と【なぎ倒せ】。

そしてこの歌にはもう一つ、プロでも失敗することがあるっていう、メタモルフォーゼのキーワード【姿変え】が入ってるんだ。

長澤さんのクロウが歌をちゃんと読み取った証にほのかに光って、すぐにフェニックスのような長い尾羽を持つ黒い鳥・三足烏に変身する。

同時に、長澤さんの制服も光り出して衣装が変わった。黒いマーメイドラインのドレスは、スレンダーな長澤さんにすごく似合ってる！

その彼女の強力な攻撃をなんとか防いだ私は、最後の攻撃の歌を歌い始めた。

夜空に浮かぶ　真円の明かり
導く光は　移り変わり

星々したがえ　君臨す
星彩よ　降り注げ　光の矢を射ろ！

攻撃のキーワードは【矢を射ろ】、メタモルフォーゼのキーワードは【移り変わり】。
仲間が作ってくれた創作歌を歌うと、ラブちゃんがほのかに光って姿が変わった。
茶色の毛並みが月の光みたいに薄い色になって、隈取りみたいな赤い模様が顔や体に浮かぶ。
かわいいけれどカッコよさもある、金兎っていう月のうさぎの姿になったラブちゃん。
あらためてかわカッコイイなぁと思っていると、私のアバター衣装も変わりはじめる。
すそがフィッシュテールになっている白金のエンパイアドレスで、ところどころ三日月のモチーフが飾られている。

こうして客観的に見てもかわいいなと思っていると、隣に座るお兄ちゃんからも声が聞こえてきた。
「やっぱり、かわいいなあ……」
こぼれ落ちるようにつぶやかれたほめ言葉は、ちょっと……いや、かなりはずかしいけれど。
うれしそうなお兄ちゃんから視線を外して、また画面を見る。
メタモルフォーゼの創作歌を成功させた私だけれど、長澤さんも初めて防御のメタモルフォーゼの創作歌を成功させる。結果、私は一ポイント差で負けてしまった。
悔しかったけれど、全力で戦いぬいたことで長澤さんが私をライバルだって——自分と同等に戦える相手だって認めてくれたの。
ちょっと怖いけれど、憧れでもある長澤さんに認めてもらえてうれしかった。
そこでお兄ちゃんが一度ＤＶＤを停止させて、「どうだった？」とお父さんとお母さんに聞いた。
「すごかったわ！　メタモルフォーゼって難しいんでしょう？　よく頑張ったわね、流歌」
「本当に。あのドレス姿もかわいかったしな！」

お母さんもお父さんも満面の笑みでほめてくれて、ちょっと恥ずかしい。
「ありがとう。……負けちゃったけどね」
照れ隠しもあって、おろしているプラチナブロンドの髪を指先でくるくるいじりながら言う。
それでも二人はすごいってほめてくれた。
そして、お母さんはふんわりと優しく笑みを浮かべる。
「でも奏月がＤＶＤを買ってくれてよかったわ。流歌の試合、見られないと思っていたから」
「直接観たかったんだけどな。すまん、行けなくて」
続けて申し訳なさそうに眉を八の字にするお父さんに、私は両手の平と一緒に首を横に振る。
「いいよ、毎回仕事休んで観に来るわけにもいかないでしょ？　学園は遠いから、絶対どこかで一泊しなきゃならないだろうし」
私とお兄ちゃんを星彩学園に通わせるため、共働きで仕事を頑張ってくれているお父さんとお母さんにこれ以上負担をかけたくない。
でも、そう言うとお父さんが少し不満そうに息を吐いて私の頭をワシャワシャと撫でた。
いつも被っているうさ耳つきの帽子は家の中だから被っていない。
直接髪をぐちゃぐちゃにされて、私は思わず不満の声を上げた。

「きゃあ！　お父さん!?」
お父さんは私を撫でる手を止め、真面目な顔で話す。
「それはそうだけどな。頑張っている我が子を直接応援したいっていう親心もあるんだぞ？」
「そうよ、流歌がまたみんなの前で歌いたいって星彩学園に行って、こうして決勝戦まで行けるくらい頑張ったのよ？　その場に行って応援したいに決まってるじゃない」
お母さんまで真剣に言ってきて、私はなにも返せなくなる。
二人の気持ちが伝わってきて……うれしいけど気恥ずかしい。
「うん……ありがとう」
照れながらもお礼を言うと、お兄ちゃんも笑顔でうなずく。
「本当に、流歌は頑張ってるよ。つらいこともあるだろうに、ちゃんと前を向いてる」
学園でいつも気づかってくれているお兄ちゃんにもほめられて、ありがたいけれど照れくささが最高潮になっちゃったよ。
それに、前を向けているのは私だけの力じゃない。
「お兄ちゃんを含めて支えてくれる人がいるからだよ？　チームの三人や、先輩たちとか」
シング・バトルをするためには、プレイヤーが歌う歌やうたアニの技を作ってくれる仲間が

必要。

作詞の千代ちゃん、作曲の千絵ちゃん、エフェクトの作成をするエンジニアの藤子ちゃん。三人の仲間が色んな意味で私を支えてくれてる。

それに、お兄ちゃんと同じチームの中島大地先輩もよくしてくれてるし！

中島先輩は人気アイドルグループS-JINのリーダーで、そのつながりで同じくS-JINメンバーである中等部三年の藤原翼先輩や、クラスは違うけれど私と同級生の横山陽向くんとも親しくしてる。

みんなのおかげだよって話す私に、お兄ちゃんは意味ありげな笑みを口元に浮かべた。

「最推しの雄翔くんも、だろ？」

「そっ！　それは、そうだけど……」

お兄ちゃんが口にした名前に、私の顔が熱くなる。

同級生で同じクラスの橘雄翔くんは、S-JINの最年少メンバーで私の最推し。

そして、大好きな男の子。

お兄ちゃんはあくまで私の最推しが雄翔くんだってことを言ったのかもしれないけれど、今の私は雄翔くんのことをアイドルじゃなくて一人の男の子として好きなんだ。

恥ずかしいし、誰にも言ったことはないんだけど……

でも、チームの三人にはなんだかバレてるみたいなんだよね。

わかりやすいって言われてるけど、そんなにわかりやすいかなぁ？

なんて考えていると、ほほ笑ましいといった表情で私を見ていたお母さんが、ふと話題を変えた。

「それで、この試合の後だったのよね？　花環プロの社長に流歌がスカウトされたのは」

「うん、伸びしろがあるって言ってくれたの」

星彩学園のトーナメントは、将来スポンサーになってくれる企業の人や芸能事務所の関係者が観戦しに来る。シング・バトルは歌で戦うeスポーツだから、プレイヤーには歌手やアイドルの仕事をしている人も多いんだ。だから、そういう意味でのスカウト目的もあるみたい。

そして決勝戦の後、私に声をかけてくれたのが花環プロダクションの花環社長なの。花環プロダクションは、S-JINや子役でもある長澤さんが所属している事務所なんだ。

「その社長さんが明日契約のために家に来るのよね？　でもアイドルとか……大丈夫なの？」

笑顔で答えた私を、お母さんが心配そうに見つめてくる。

私がアイドルになることに反対しているわけじゃないことはわかってる。

お母さんはきっと、私が一年前と同じになっちゃわないか心配してくれているんだよね。

――一年前、小学六年生の私は、人前でまったく歌えなかった。

歌のコンテストに参加して、初めて大勢の知らない人の前で歌おうとしたとき、指差されて、なにか言われてるのを見て……怖くなって歌えなかった。

それでも知っている人や数人の前でなら歌えていたんだけど、コンテストのことをからかってくる同級生や友だちの言葉のせいで、いつからか、完全に家族以外の前では歌えなくなっちゃったんだ。

歌手やアイドルになるのが夢で、たくさんの人に私の歌を届けたいって思っていたから、あの頃は本当につらかった。

あのときのことを思い出すと、今でものどの奥がギュッと締まって声が出にくくなる。

でも、シング・バトルのことを知って、星彩学園に通うようになって、仲間や憧れの人たちを見つけて……みんなの励ましのおかげで、少しずつだけどまた人前で歌えるようになってきた。

だから、自信を持って大丈夫とは言えないけれど、それでもお母さんが不安に思うほどのことにはならないはず。

私はぐっと両手を握りしめて、お母さんを見上げた。

「確かに不安なところもあるけど、雄翔くんたちが、花環プロはちゃんとそういう所もサポートしてくれるって言ってたし」

実際に会って話した花環社長は、見た目はちょっと怖いけれどいい人だった。

心配しないでって伝えると、お兄ちゃんもフォローしてくれる。

「母さん、そこまで心配しなくても大丈夫だよ。花環社長には俺も会ったけれど、ちゃんと流歌のこと考えてくれているみたいだったし。それに、流歌も成長してるからな」

たまに天然なところがあるけれど、優しくて頼りになるお兄ちゃん。

そんなお兄ちゃんの言葉に、お母さんは心配顔を優しい笑顔に変えてうなずいてくれた。

「そう？　……そうね」

お父さんもうんうんとうなずいて、また私の頭をワシャワシャと撫でる。

「流歌は頑張り屋だからな。でも、つらいときは無理しないで周りに相談するんだぞ？」

「もう！　また髪がグシャグシャ！　でも、うん。わかったよ、お父さん」

髪を乱されたことにはしっかりと怒ったけれど、お父さんの言葉は私のことを本当に思ってのものだったから、それには感謝を込めて返事をした。

他の学年の決勝戦動画も家族と見終えて、私は自分の部屋にもどった。
ベッドに腰かけて、充電していたスマホの電源を入れると、パッとラブちゃんが映し出される。
モフモフの手に持った手紙を私に差し出していた。
吹き出しには【メッセージが届いてるよ！】と表示されている。
うたアニは、こんな感じでスマホの中のお仕事もしてくれるの！
差し出された手紙をタップすると、連携されているメッセージアプリが起動して、トーク画面が表示される。
新着のマークがついているのは【仲間】（4）って書かれているグループチャット。
すぐに開いてみると、学園の友だちで、シング・バトルのチームメイトでもある千代ちゃん、千絵ちゃん、藤子ちゃんからメッセージがあった。
全部私あてみたい。

【こんばんは。流歌、花環プロの契約って明日だよね？　大丈夫？　緊張してない？】
一番に心配のメッセージをくれていたのは藤子ちゃん。
ポンポンと質問が出てくるところが猪突猛進な藤子ちゃんらしい。
それに続いているのは、千代ちゃんと千絵ちゃんのメッセージ。
【藤子、心配しすぎ！　でもきっと、ちょっとは緊張してるよね。契約ってなると、口約束とは違うしちょっとこわい感じするもん】
【でも契約書は流歌のお父さんとお母さんがちゃんと読んでくれるはずだし、花環社長も見た目はともかくいい人っぽかったし。……それに橘くんも太鼓判押してたしね？】
双子の姉の千代ちゃんのメッセージをたしなめた千絵ちゃんは、雄翔くんのことにも触れた。
ニヤリとした絵文字が最後についてるのを見ると、千絵ちゃんはきっとこの文章打ったときニマニマしてたんだろうな。
雄翔くんのことを言われて恥ずかしいけれど、からかわれているのがわかるから、逆にスン……となっちゃう。
だから私は冷静に返した。
【そうだね。雄翔くんもだけど、花環プロの先輩でもあるＳ-ＪＩＮのメンバーが大丈夫だっ

て言ってたし、緊張はするけど不安はそんなにないよ】

私の返事に、すぐに既読が四つつく。

また千絵ちゃんが返事をくれた。

【まあ、確かに橘くんだけじゃなくて、横山くんや先輩たちも花環プロをオススメしてたもんね】

私が普通に返したからか、千絵ちゃんも普通に返してくる。

うーん、ちょっとは乗った方がよかったかな？　いや、でも乗ったらもっとからかわれるのがオチだし。

なんて考えていると、藤子ちゃんがメッセージを送ってくる。

【じゃあ、そっちは大丈夫そうだね！　それはそうと、合宿はついに三日後だよね？　その前日は流歌の家に泊まるし……お泊まりの荷物以外で必要なものってあったっけ？】

文字だけでワクワクしているような様子がわかる。

そんなメッセージに、千代ちゃんと千絵ちゃんが返事をした。

【シング・バトルの新曲も作るんだから、データは絶対忘れないでね！】

【そうだよ。全国ジュニア大会までには新曲二つは作るって決めたでしょ？】

そんな三人のメッセージを読んで、明日の契約に関してとは別の意味で緊張してくる。

私もスマホにメッセージを打ち込んだ。

【新曲も楽しみだけど、みんなと合宿するって思うとなんだかドキドキするなぁ】

そう、この夏休みはみんなと合宿することになったんだ！

夏と冬に行われる全国ジュニア大会について改めて調べてみたら、私の地元から近い場所でも予選が行われるってわかった。だから予選はそこへ参加することに決めたの。

ただ、そうなるとチームのみんなとは今回別行動になっちゃう。それは少し寂しいなって話してたら、雄翔くんたちＳ-ＪＩＮのみんなが合宿のことを教えてくれたんだ。

花環プロはシング・バトルの大会に参加する所属タレントのために、全国に合宿所をいくつか持っているんだって。しかも作詞家、作曲家、エンジニアの訓練プログラムもあって、プレイヤーだけでなく、チームメンバーも参加できるらしい。

夏と冬はジュニア大会のために開放しているから、花環プロに入る事になった私と、そのチームメンバーでも利用できるんじゃないかって話してくれたの。

……まだアイドルとしてデビューもしていないのにいいのかな？　って不安になる私に、花環社長は契約をすませたあとなら問題ないって言ってくれた。

だからその場で合宿に行くことが決まったんだ。お兄ちゃんも中島先輩のチームメンバーとして同じ合宿所に行くから、両親からの許可もすんなり取れたし。

あとは、明日の契約が無事終われば問題なし！

そう考えている間にも、スマホ画面に表示されるメッセージは増えていく。

【あたしもドキドキするよぉ。合宿も楽しみだけど、友だちの家にお泊まりとか初めてだし！】

そんなメッセージと一緒に、藤子ちゃんは汗マークのついた文鳥のスタンプを送っていた。

いつもまっすぐで猪突猛進な藤子ちゃんでも、さすがに緊張するみたい。

そういえば、私も友だちの家にお泊まりってしたことないかも。初めてのことは緊張しちゃうよね……

藤子ちゃんの緊張は他の二人にも伝わったみたい。

【確かに友だちの家にお泊まりは初めてだね。小学生の頃は基本禁止だったし】

【そうね、親戚の家だったらよく泊まっていたけど】

千代ちゃん千絵ちゃんとメッセージが続いたあと、【でも、楽しみの方が強いかな】と千代ちゃんが笑顔の絵文字をつけて言う。

すると藤子ちゃんの様子が元気なものになった。

【そうだね、確かに楽しみのワクワクの方が強いかも！　てことで、大会の方に集中しようかな】

緊張していたのもウソではないだろうけど……切り替えが早い。

藤子ちゃんらしいなと思っていると、ポン、とメッセージが続く。

【一学期末トーナメントではノーヴァ逃しちゃったからね。全国大会では獲得目指して頑張ろう！】

拳を握って語っている藤子ちゃんの姿が目に浮かんでくる。私は画面の前で小さくうなずいた。

私も、ノーヴァが欲しい！

ノーヴァっていうのは、星彩学園からもらえる星のピンバッジのこと。在学中に七つ集めると、高等部を卒業した後に世界大会への出場権が得られるんだ。

学園では学期末トーナメントの各学年の優勝者に渡されるから、二位だった私は一学期のトーナメントではもらえなかったんだよね。いいところまで行ったから、結構悔しい。

他には夏と冬の全国ジュニア大会で三位までに入れたらもらえるから、今度こそノーヴァをゲットできるよう頑張りたいな。

そう思ったのは私だけじゃないみたい。

【確かにノーヴァは欲しいね】

【うん、私たちの実力なら全国大会でもいい線行けると思うし、狙っていこう！】

千絵ちゃんが同意して、千代ちゃんがやる気をみなぎらせる。

私もみんなのやる気に負けないように、メッセージを打った。

【そうだね、私も歌を頑張るよ！】

メッセージ画面にはスタンプがいくつか並ぶ。

それから明後日会おうね！　と送り返して、三人とのグループチャットは終わった。

お風呂にでも入ろうかとスマホをオフにしようとすると、ちょうどピコンと通知が届く。

ポップアップに書かれていたメッセージを送ってきた相手の名前が目に入って――、私はすぐにその通知をタップした。

ゆ、雄翔くんからだ！

【こんばんは。明日契約のために社長が流歌の家に行くんだよな？　緊張してる？】

藤子ちゃんほど質問攻めなメッセージじゃないけれど、同じ内容につい口元がゆるんだ。

同時に、好きな人に気にかけてもらえて少しドキドキする。

うれしくて、早く返事を送りたい。でも、間違いがないよう丁寧に文章を考えたい。

そんな気持ちを戦わせながら打ち込んだメッセージを送る。

【こんばんは。少しは緊張してるかな？　でも、花環プロはシング・バトルのプロプレイヤーを目指す私にはピッタリだって雄翔くんが教えてくれたし、楽しみな部分も多いかも】

すぐに既読がつく。少しすると返事が届いた。

【それならよかった。アイドル活動は大変なこともあるけど、うれしいことや楽しいこともたくさんあるから、流歌も楽しんで活動できるといいな】

これはきっと、アイドルの先輩としての言葉だ。画面を見るだけで、ワクワクしてくる。
不安はどうしたってあるけれど、雄翔くんの言うとおり、うれしいことや楽しいこともたくさんあるはずだ。メッセージから滲み出てくる雄翔くんの優しさを感じるうちに、なんだかとても会いたくなっちゃった。
……でも、そんなこと言えるはずないし！
【うん、ありがとう】
無難な返事をする。
すると、すぐにまたメッセージが届いた。
それを見て、心臓が止まりそうになる。
【それにしても、朝に流歌と会えないのって……なんだかさびしいな】
学園にいる間は、雄翔くんと初めて会った場所でもある秘密の東屋で毎朝会っていた。雄翔くんはそれを思い出したのかな？
軽い調子のメッセージに見えるけれど、私と同じようなことを思ってくれていたのかな？　って思うと、ドキドキしてメッセージから目が離せない。
会いたいなって、素直に送っちゃってもいいのかな？　でも、そんなすぐに会える距離には

いないんだし。
ドキドキしたり、シュンとしたり。心の中で感情がせわしく揺らいでいた。
そんな私の頭の中に、フッと数日前の光景がよぎる。
『アイドルは、原則恋愛禁止だからね』
花環社長と話して、アイドルになることを決意した後に言われたセリフ。
恋愛禁止と言いつつも、完全にダメってわけじゃなくて……ファンにはバレないようにしなさいってことらしいけど。
とはいえ、今の私は完全に片思い状態。だから私の気持ちがバレないように振る舞っていれば今のところは問題ないと思う。
千代ちゃんたちにはなぜかバレちゃってるみたいだけど、いつも一緒にいるからだよね、きっと。
雄翔くんには毎朝会っていたけれど……バレては、いないよね？
そんなふうに色々考えちゃって、【そうだね、私もちょっとさびしいかも】なんて同意する返事しか送れなかった。
でも雄翔くんから【同感】と書かれたうなずいているかわいらしいヘビのスタンプが送られ

てきて、すぐに笑顔になっちゃう。
同じ気持ちなのがうれしい。
やっぱり会いたいな、って思いながらスマホを見つめていると、雄翔くんから続けてメッセージが送られてきた。
【でも、近いうちにまた会えるからな】
「あ、合宿で？」
すぐに思い当たって声に出す。
S-JINの四人は予選前に私の地元近くでロケがあるから、予選会場も合宿場所も私と同じところにしたんだって。
だから、三日後にはまた雄翔くんと会えるはずなんだよね。
そのことを思い出したら、さびしさよりもよろこびの方が強くなる。そのままメッセージを打ち込んだ。
【そうだね、合宿所で雄翔くんと会えるのが楽しみだよ！】
ここはみんなに会えるのが楽しみってことにしておいた方がよかったかな？　どうしよう、これじゃあみんなよりも雄翔くんに会えるのが一番楽しみって読み取れちゃうかも？

それとも深読みしすぎ？
私は後ろに倒れて、ぼふんと枕に頭をうずめた。
「あーもうわからないよ。前はどうだったっけ？」
私の雄翔くんを好きだって気持ち。それが周りに知られないようにしなきゃいけないって思うと、どこまでが問題ないのかわからなくなっちゃう。
送ってしまったメッセージを見つめながら「うーん」とうなっていると、またすぐに返事が来た。
【俺も、流歌に会えるのが楽しみだよ】
「……私に会えるのが、楽しみ」
声に出して、メッセージの内容をしっかり理解すると、私の心臓の鼓動は一気に駆け足になる。
雄翔くんが、私に会えることを楽しみだって言ってくれた？
悩んでいたことなんて吹き飛んで、恋愛禁止なんて言葉を忘れてしまいそうになるくらい、好きって気持ちが大きくなる。
本当に忘れるわけにはいかないけれど、一人でいる今はこの幸せに浸っていてもいいよね？

【ありがとう。じゃあ、合宿で会おうね！】

返事を送信して、まだ少しドキドキする胸にスマホを抱くように当てた。

今すぐにでも会いたいって思っちゃうけれど、さすがにそれは無理だから……

だから、深呼吸して鼓動を落ち着かせて、「よし！」と声を上げる。

「ちゃんと合宿で会えるように、まずは明日、無事に契約完了しなきゃだよね！」

でないと合宿に参加する権利をもらえない。

明日を楽しみにしながら、私は部屋の電気を消した。

○契約成立！　そして合宿へ

翌日、家に来た花環社長はさっそく契約に関する説明をしてくれた。

そして書類にお父さんがサインをして、ハンコをおす。

向かい側に座っていた花環社長がその契約書を手に取って、笑みを浮かべた。

「はい、これで契約完了です。ありがとうございます」

普段はいかつい見た目で人をこわがらせないようにって、女の人みたいにおしとやかな話し方をする花環社長。だけど、今は真面目なお仕事だからか丁寧な口調で話していた。

初めはちょっとこわい顔にひるんでいたお父さんだったけれど、契約に関して話しているうちに安心みたい。

やわらかい笑顔で「流歌をよろしくお願いします」と頭を下げていた。

「はい、お預かりさせていただきます。流歌さんのプロデュースに関しては色々と考えているので、方針が決まり次第ご連絡させていただきますね」

ついに、アイドルになるための準備が始まるんだ。

どんな風にプロデュースしてもらえるんだろう？

S-JINはそれぞれのうたアニと一緒に動画配信とかしているし、私もラブちゃんと一緒に映ったりするのかな？

ホログラムで一緒のステージに立つこともできるし……楽しみだな。

未来へのワクワクに思いを馳せていると、お父さんと学期末トーナメントの話をしていた花環社長が「そうそう」ってなにかを思い出したみたいに私の方を見た。

「シング・バトルといえば、この夏休み期間中に行われる全国ジュニア大会ね。これ、忘れな

いうちに渡しておくわ」
そう話した花環社長は、床に置いていたカバンから封筒を取り出して私に差し出した。
「これは？」
封をしていない封筒を受け取りながら聞き返すと、花環社長はニッコリと笑って「予選会場に入るためのチケットよ」と答えてくれる。
花環社長のニッコリ笑顔はちょっとこわい。
少しドキドキしていると、隣に座るお父さんがおどろいた様子で口を挟んだ。
「あの、その口調は……？」
とつぜん花環社長の口調がいつものおしとやかなものに変わったことで、とまどっているみたい。
花環社長は小さくハッとしたような顔をしてから、またしっかりした口調にもどった。
「あ、申し訳ありません。普段はこういう口調で話しているんです。見た目でこわがらせてしまうことがありますから」
その答えにお父さんはなんとも言えない微妙な表情で笑っていたけれど、花環社長は特に気にせず、また私へ向き直って続きを話し始めた。

「ウチはＴＯＫＩＷＡと提携しているから、大会チケットを融通してもらえるの。だから所属タレントのチームメイトやご家族の分を渡すことにしているのよ」
「そうなんですか」
軽くおどろいていると、花環社長は続けて大事なことを口にする。
「プレイヤーは参加証がチケット代わりになるけれど、チームメイトはチケットがなければ会場に入れないからね」
「そうなんですか!?」
知らなかった！
思わず大きな声を上げる。
家族の分はともかく、チームメイトの分は買わなくても大丈夫だと思っていた。
危なかった。このまま知らずにいたら、みんなで一緒に大会が見られないところだった……！
よかった、と胸をなでおろしていると、花環社長は予選当日の予定も話してくれる。
「大会当日は、参加者とそのチームメンバーをウチの事務所のバスで送迎するわ。流歌たちは合宿を利用するのよね？　そこからもバスは出るから、それに乗って会場へ向かってちょうだ

い」

「はい。……でも、いいんですか？　合宿も無料だって聞きましたし、送迎まで」

なんだか至れり尽くせりな状況に、逆に心配になる。アイドルデビューもまだなのに、所属タレントってだけでそこまで甘えていいのかな？

でも花環社長はたくましい笑顔で私の心配を吹き飛ばしてくれた。

「問題ないわ。これからアイドルとしてうちの事務所で活躍してくれる流歌への投資でもあるし、なにより契約書にはそのことも書かれているから」

ほら、と、テーブルに置いた契約書の一部分を指差して見せてくれる。

それは難しい文章だったからちゃんと理解できなかったけれど、一緒に契約書を覗き込んだお父さんが私にもわかるように説明してくれた。

「ちゃんと書いてあるぞ。【シング・バトルの大会に参加するための交通費や宿泊費等も経費として事務所側が支払う】って」

「そ、そうなんだ……」

契約書をじっと見つめながら、ほえぇ～とびっくりした声を上げちゃう。

花環プロって本当に大手の事務所なんだなあ。そんな風におどろく私に、花環社長はいかつい顔を優しくゆるめる。少し顔が柔らかくなった。

「ウチはタレントのサポートはしっかりやるって決めているの。なにか問題や心配事があったら、私にも気軽に連絡してくれていいからね？」

電話だとすぐに出られないときもあるけれど、とつけくわえる花環社長は、普段から忙しくしているんだろう。そんな社長が気軽に連絡してって言ってくれるなんて……

本当にいい事務所なんだなって、うれしくなる。

花環プロに入れて、本当によかった！

その後はお母さんやお兄ちゃんも混じって、ちょっとだけお話をしてから花環社長は帰り支度を始める。

……そして、帰り際にビックリな情報を教えてくれたんだ。

「そういえば流歌はもう見たかしら？　アナタ、星彩学園のＨＰのＰＲ動画に登場していたわよ？」

「え!?　知らないです！　いつの間に!?」

なにそれ！　どういうこと!?

おどろく私に、花環社長は面白そうに笑ってもう少しくわしく話してくれた。

「昨日からかしら？　学期末トーナメントの映像を使っているみたいだったわよ？」
「ええ!?」
今すぐ確認したかったけれど、花環社長のお見送りをしないわけにはいかない。
ソワソワしながら見送って、花環社長の運転する車が見えなくなってから、私はすぐに部屋へ戻った。
ベッドに腰かけると、すぐに自分のスマホを操作して星彩学園のHPにアクセスする。
トップページに埋め込まれている動画には、確かにシング・バトル中の私の姿が映っていた。
ちょうどメタモルフォーゼするところを切り取っているみたい。私だけでなく長澤さんや他の学年の映像もいくつか流れていた。
入学するときに、学園行事の写真や映像はホームページやチラシに掲載することがあるって説明されたけど、まさかこんなに目立つ状態で公開されるなんて！
入学時に了承しているから、ダメじゃないんだけど……
「でもこれ、学園以外の人にも見られちゃうんだよね？　うー、恥ずかしいよぉ～」
昨日観たDVDはあくまでも生徒用だった。でも、この動画はちがう。
このHPを開いたら誰でも見られるってことだもん！

でも、これからアイドルになって大勢の人の前でも歌えるようになったら、こんな風に動画配信されることもあるはず。今から恥ずかしがってちゃダメなんだろうけど……
「それでも恥ずかしいものは恥ずかしいよ！」
繰り返し再生される動画を見ながら思わず叫ぶと、画面にいくつもの通知がピコンピコンと表示された。
S-JINの四人と長澤さんからのメッセージだ。
花環社長がさっそく契約が完了したことを教えたのか、みんな【おめでとう】とか、【芸能界へようこそ】みたいなメッセージから始まっている。
長澤さんはお祝いの言葉をくれつつ、厳しい世界でもあるから気を引き締めてってアドバイスをしてくれていたし、中島先輩は困ったことがあったら相談するんだぞって言ってくれていて頼もしい。
二人は大会前の合宿についても触れて「楽しみにしている」と、それぞれのメッセージを締めくくっていた。
藤原先輩と陽向くんは二人ともお祝いの言葉から始まって、こちらも合宿で会えるのを楽しみにしているって内容。藤原先輩は落ち着いた感じで、陽向くんは元気な絵文字つきだった。

【契約完了お疲れさま。これで問題なく合宿に参加できるね、会えるのを楽しみにしているよ】

【芸能界へようこそ！　これで俺たち同じ事務所の仲間だな。合宿一緒に頑張ろうぜ！】

二人とも花環プロの後輩になった私に、いつでも頼ってくれていいよって伝えてくれているんだけれど、メッセージの雰囲気は本当に対照的。

文章にも性格って表れるよね。

なんにしても、こんな風に気づかってもらえてありがたいなって思った。

そして雄翔くんは――

【おめでとう、合宿ではお互いに頑張ろうな。なにかあればいつでも相談に乗るから】

みんなと同じように優しく私を気づかってくれるメッセージ。

でも、他の四人より一緒にいる時間が長いからか――ううん、きっと好きな人だからだ。

同じ内容でも、すごく心が温かくなった。

そんなやわらかい気持ちを胸に宿しながら、私はみんなに感謝のメッセージを返していった。

○トラウマの原因

次の日、私はトレードマークにもなっているうさ耳つきの大きな帽子をかぶると、チームメンバーの三人を迎えるために駅へと向かった。

この真夏日の中で帽子をかぶるのは暑いけれど、日光を浴びずにすむからちょうどいいのかも。

お父さんとお母さんは今日も仕事だけど、夜にはおもてなしのためにいつもよりちょっといい夕飯を準備するって張り切っていた。ただ、お菓子とかは特に買っていないから、家へ案内する前にコンビニで買ってきなさいってお金までもらっている。

お兄ちゃんも一緒に迎えに行かない？　って誘ったけれど、用事があるみたいで断られちゃった。

そのとき、お菓子買うならついでにって頼まれたものがあるんだけど……

「これで合ってるよね？　でも、これって……お兄ちゃん、たまに変なもの試すよね」

私が買ったのは、『コンビニの限定販売のぶどう味ポテトチップス』。

こういう変わり種の味の商品は今までもなぜかうちによく置かれていた。お兄ちゃん、変な

味でも一度は必ず試してたっけ。
中には意外と美味しいものもあったけれど、ほとんどが微妙な味。
お世辞にも美味しいと言えないものがほとんどだ。
なのにどうしていつも試しちゃうんだろう？
ため息交じりにコンビニを出て歩いていると、よく知っている声に呼び止められた。
「あれ？　もしかして流歌？」
「えっ？」
名前を呼ばれて、思わず身体に緊張が走る。
しばらく聞いていなかった声。けれど、忘れることなんてできない声。
声の方を見ると、見知った女の子がいた。
少しつりぎみだけれど、ぱっちりと大きくてかわいい雰囲気の目。
記憶と同じように頭のてっぺんでお団子にしている髪型には、前はつけていなかったかわいい柄のシュシュがつけられていた。
「夏姫、ちゃん？」
名前を呼ぶと、彼女はぱぁ、と明るい笑顔になる。

「やっぱり流歌だ！　どうしたの？　そんなおっきな帽子かぶって。うさ耳ついててかわいいけど、それじゃあ顔を隠してるみたいじゃん」

夏姫ちゃんは、小学校の同級生だった女の子だ。

一年から六年までずっと同じクラスで、親友って言ってもいいくらい仲良しで……

でも、それだけ親しいからこそ、彼女の言葉は私にとって重いんだ。

彼女は私の前に立つと、にぱっと笑った。

「あ、もしかしてそうやって顔を隠すことで、人前でも歌えるようにしてるの？」

「そ、れは……」

会う予定のなかった人と会って、変に心臓がドクドクと鳴っている。

なんだか喉が詰まって、うまく話せない。

そんな私に構わず、夏姫ちゃんは次々と自分の話したいことを言葉にしていた。

「心配してたんだよ？　流歌の行った星彩学園ってシング・バトルのための学園でしょう？」

楽しそうに話す夏姫ちゃんを見つめながら、言わないで、と思わず心の中で願う。

「つまり、歌う練習をたくさんするってことなんだよね？」

せっかく少し克服できたのに……リアルでまたあの言葉を聞きたくない。

そう強く願うけれど、ムダだった。

夏姫ちゃんは、心配そうな表情でその言葉を口にする。

「人前で歌えない流歌が、星彩学園でちゃんと歌えるのかなって気になってたんだ」

「っ！」

息を呑む。同時に、心臓が大きくドクンと鳴った。

『人前で歌えない流歌』

その言葉は、私のトラウマを直撃する。

小学五年生のときに出た、歌のコンテスト。知らない大勢の人の前に出て、緊張して歌えなかった。

それが原因で同級生にからかわれてイヤだったけれど、それ以上に夏姫ちゃんの言った言葉が私を押さえつけていたんだ。

『流歌は人前じゃあ歌えないんだもんね』

友だちの前でなら歌えていたのに、夏姫ちゃんはそう言って私を人前で歌えなくした。

歌おうとすると、夏姫ちゃんはまるで私を守るように『流歌は人前で歌えないの、無理に歌わせるようなことしないで！』と間に入ってきたんだ。

悪意があってしたことじゃないのはわかってる。夏姫ちゃんは思い込みが激しくて、自分の間違いに気づかないまま突き進んじゃうところがあるから、今回もそうなんだろうなって。

でもだからこそ、言い返せなかった。

言えなくて、ため込んで……それで、本当に人前で歌えなくなっていっちゃったんだ。

足が震える。

星彩学園に入って、チームメイトや雄翔くんに励まされて。S-JINのみんなやライバルの長澤さんと関わって、そうして少しずつ強くなってきたところだったのに……

これからアイドルとしてデビューするためにも、もっと自分に自信を持てるよう頑張ろうとしていて、かなり克服できたと思っていたのに。

たった一言で、びっくりするぐらい私は動けなくなっていた。

夏姫ちゃんが悪いわけじゃない。

思い込みが激しい彼女に、ちゃんと違うって強く言えない私が弱いんだ。

ちゃんと伝えられる強さを持ちたいと思うのに、夏姫ちゃんと会って話す勇気をまだ持てないでいる。だから、愛想笑いみたいな不格好な笑みをつくってしまうんだ。

「あ、ははは……」

誤魔化すような笑い声でどうにか乗り切ろうとしたとき、ここにいるはずのない人の声が後ろから私を呼んだ。

「流歌？」

「え？」

その声を直接聞けるのは明日以降のはずだったのに、どうして今聞こえるのかわからない。

でも、振り返ってみたらそれは確かに明日合宿所で会う予定だった雄翔くんで、その姿を見たとたん私はスゥーと息が吸えた。

雄翔くんの周りには陽向くんと藤原先輩、そして中島先輩もそろっている。

一応変装なのか、雄翔くんと中島先輩は帽子をかぶっていて、陽向くんと藤原先輩はメガネをかけているけれど、確かにS-JINのみんなだ。

「あ！　本当に流歌だ！　会えるといいなって思ってたけど、本当に会えるなんてラッキーだな！」

私がおどろいているうちに、陽向くんがいつもの元気な笑顔で近づいてくる。トレードマークのイヤーカフが太陽の光を反射して、いつも以上に強く光った。

「な、なにこの人たち？　流歌の知り合い？　みんなイケメンなんだけど……」

夏姫ちゃんが焦った様子で耳打ちしてくる。怖がっているとかじゃなくて、カッコイイ四人にたじろいでるって様子だ。

私はあわてて夏姫ちゃんに説明する。

「あ、この人たちは星彩学園の同級生と先輩たちなんだ」

夏姫ちゃんへ説明する声は、意外にもスッと出た。

四人は私服だし、きっとプライベートだからＳ-ＪＩＮだってことは知られたくないよね。

私が秘密を守らないと……と思ったんだけど、さすがは小中学生に大人気のアイドルグループ。紹介している間に夏姫ちゃんは気づいちゃったみたい。

「同級生と先輩？　っていうか、Ｓ-ＪＩＮじゃん！　同じ学園なのは知ってたけど、え!?　知り合いなの!?」

「う、うん」

誤魔化すこともできないくらい完全にバレてる。

じつはお昼も一緒に食べてるとか、雄翔くんとは同じクラスで隣の席だとかは言わない方がいいかな。なんだか、知り合いってだけでものすごく興奮しちゃってるし。

ぎこちない笑みでうなずいていると、そばに来た雄翔くんがちらっと夏姫ちゃんを見た。

「彼女は流歌の友だち？」

「あ、うん。小学校の同級生で……一番仲のいい、友だちなんだ」

素直に親友だって言えればよかったけれど、さっき傷をえぐられたせいもあって言葉を濁しちゃう。

私、心がせまいのかなって、また別の意味で落ち込んじゃった。

思わず下を向いて帽子の端をギュッとつかむと、雄翔くんが「流歌？」と心配そうにのぞき込んでくる。

雄翔くんにまで心配かけちゃって、今日の私は本当にダメダメだよ。

へこんでいると、Ｓ-ＪＩＮの登場に慌てていた夏姫ちゃんが「あ！」と声を上げた。

「そうだ、流歌と同級生なら聞きたいんですけど……この子、学園でちゃんと歌えてますか？　人前で歌えない子だから、心配で……」

さっきまでできていた呼吸が、また苦しくなる。すんなり動いていた唇が、ぎゅっと固まってしまう。

また、言われちゃった。

夏姫ちゃんは本当に私のことが心配で質問したんだろうけれど、私にとってやっぱりそれは

聞きたくない言葉で……

だから私は、耳を塞ぐ代わりに帽子の端を引っ張って深くかぶった。のぞき込んできていた雄翔くんの顔も見えなくなるくらい、深く。

すると、陽向くんが夏姫ちゃんの質問に不思議そうな声で答えた。

「ん？　流歌はちゃんと歌えてるぜ。学期末トーナメントでは準優勝までいったしな！」

「え!?　本当に!?」

陽向くんの明るい声に顔を上げると、すごくおどろいている夏姫ちゃんの顔が見えた。

そんな彼女に、藤原先輩がうなずく。

「うん。確かに苦手なところはあるみたいだけれど、流歌さんは頑張ってるよ」

「そうそう、本当に頑張ってるよ」

続けて中島先輩も同意してくれた。でも、続いた言葉に私は慌てることになる。

「気になるなら学園のHP見てみるといいんじゃないか？　流歌ちゃんのバトル、学園PRの動画に使われてたから」

「なっ!?」

あれを見られちゃうの？

学園の人たちに見られるのはいいんだけれど、学園での私を知らない人に見られるのはなんだか恥ずかしいよ！

確かに、あの動画は私がちゃんと歌えているって証明にもなるけれど……

なんて思ったけれど、夏姫ちゃんは先輩たちの言葉を聞いて、ふんふんとうなずいた。

「あ、そっか。シング・バトルはハコの中で一人で歌うんだもんね。だから大丈夫なんだ」

シング・バトルでのプレイヤーは、夏姫ちゃんの言う通りハコと呼ばれる密閉された部屋で歌う。だから人前ではないってことで納得されてしまった。

確かにそうだけど……ちがうよって、人前でも歌えるよう頑張ってるよって、言えればよかったんだけれど、私はそれを声に出すことができなかった。

落ち込んでいると、雄翔くんが私に声を掛けてくれる。

「流歌、もしかして今駅に向かってたんじゃないのか？　吉岡たちを迎えに行くんだろ？」

「え？　あ、うん」

そうだった！

慌てて時計を見て時間を確認する。コンビニに寄るために早めに家を出たから、まだ時間の余裕はあるけど……

視線をそのまま上げると、雄翔くんが私を見てちょっと心配そうな顔をしていた。
雄翔くんには今日みんなで私の家にお泊まりすることは話していたから、もしかして気づかって言ってくれているのかな？
考えながら動きを止めていると、中島先輩も後押ししてくれた。
「あまり道草くってるとみんなを待たせちゃうんじゃないか？　駅だったら俺たちも近くまで行くし、一緒に行こうぜ」
ニカッと笑う中島先輩に、夏姫ちゃんはハッとして少し申し訳なさそうに眉を下げる。
「あ、用事あったんだ？　ごめんね引き留めて。じゃあまたね、流歌」
「うん、ばいばい」
手を振りあって夏姫ちゃんと別れると、私は無意識にホッと安心したような息をつく。
夏姫ちゃんのことは嫌いじゃない。
悪い子じゃないし、むしろいい子だって思ってる。
でも、苦手に思う気持ちもなくすことができなくて……
それがまたつらくて悲しかった。
また自然と顔が下を向きかけたけれど、その前に中島先輩から明るい声をかけられる。

立ち読みサンプル
はここまで

「じゃ、俺たちは駅に行こうな」
中島先輩の言葉で、私はＳ-ＪＩＮのみんなと駅へと向かうことになった。
四人はついさっきまでロケの仕事だったそうで、今は駅近くにある宿泊予定のホテルへ向かう途中だったんだって。
社長からここが私の地元だということは聞いて知っていたけれど、まさか会えるとは思わなかったからおどろいたって、主に陽向くんが話してくれた。
私も早くても会えるのは明日合宿所へ着いてからだと思っていたから、びっくりしたよ。
「近くに泊まるなら教えてくれてもよかったのに」
思わずそうつぶやくと、雄翔くんが苦笑する。
「会えるのは早くても明日のバスの中だと思っていたから。言ってしまったら会いたくなりそうだったし、チームメイトとのお泊まり会を邪魔したくなかったからな」
「そ、そうなんだ」
さらりと『会いたくなりそう』なんて口にした雄翔くんに、私はなんて返せばいいのかわからなくて視線をアスファルトに向ける。
黄色い点字ブロックを見つめながら、顔に熱が集中するのを感じた。